

# 核兵器廃絶と世界恒久平和を願って 被爆67周年原水禁長崎大会

8月7日、9日、「核も戦争もない平和な21世紀に！被爆67周年原水爆禁止世界大会・長崎大会」に、藤本眞利子特別執行委員と事務局2人が参加した。



脱原発! 脱基地を!とデモ行進する参加者

初日は、爆心地公園で「オスプレイ配備と原発再稼動は許さない! 脱原発! 脱基地! ナガサキ集会」がおこなわれた。地元代表として長崎平和運動センターの川原重信議長より全国からの参加者にあいさつがあ

った。近日のニュースでも報道された沖縄県普天間基地へのオスプレイの配備問題について、屋良チエミ宜野湾市議会議員は「8月5日に予定していたオスプレイ配備反対の県民集会は台風のために延期されたが、沖縄では県民一丸となって反対している」と報告があり、また福島原発が収束しないなかでの大飯原発の再稼動について、福島県平和フォーラムの五十嵐史郎代表は「福島県の半分以上は放射線管理区域以上に汚染されてしまった。この経験を脱原発運動でいかしてほしい」と訴えた。

集まった参加者は、脱原発と脱基地を一体のものとしてとりくむことを確認し「核兵器廃絶2012平和ナガサキ大会」が開催される長崎県立総合体育館まで「すべての原発を廃炉にして! オスプレイの配備は許さないぞ!」とシュプレヒコールをしながら、デモ行進をおこなった。

県立総合体育館前では、高校生平和大使が核兵器の廃絶と平和な世界の実現を求め、「高校生1万人署名活動」を兼ねながら出迎え、連合・原水禁・核禁会議共同行事の「核兵器廃絶2012平和ナガサキ大会」が開催された。

## 長崎大会 まとめ集会



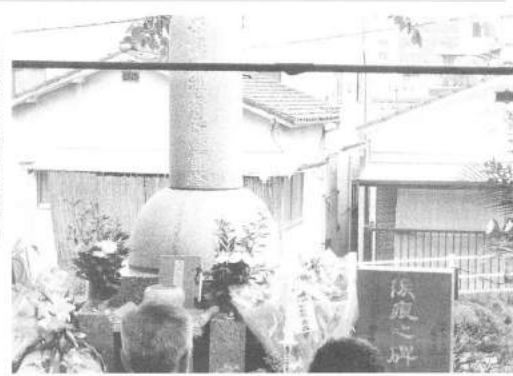
平和な世界を求めて呼びかける高校生平和大使

開会あいさつに、大会実行委員長川野浩一原水爆禁止日本国民会議議長は「政府は、原子力基本法で核兵器開発につながる改訂をおこなった」と厳しく批判した。主催者を代表して南雲弘之連合事務局長は「原発依存を減らし、最終的には原発に依存しない社会をめざす」と述べた。来賓あいさつに中村法道長崎県知事、田上富久長崎市長、そして海外からITUC（国際労働組合総連合）スティーブン・ベネディクト人権・労働組合権局局長があいさつをおこなった。

つづいて被爆者の訴えとして、長崎県被爆者手帳友愛会の中島正徳会長は、当時15歳で被爆した経験を語り「体がづくかぎり戦争に反対する活動をつづけていく」とのべた。また今年度、高校生平和大使の代表に16人が選出され、大震災で被災した岩手県立釜石高校の菊池のどかさんが「国際的な支援に感謝しながら、核兵器の廃絶を訴えたい」と決意をのべた。

最後に「核兵器廃絶と世界の恒久平和の実現をめざす」とのべた。2日目は、午前中は各分科会、午後からフィールドワークに参加した。各分科会ともに、被爆者の体験、被爆者の願いを当事者から聞き、核と人類は共存できない、これからのエネルギー政策をどうするか深く考えさせられる分科会であった。

3日目のまとめ集会で川野議長は「原発も原発も同じ核だ。国民は脱原発に向かっている。私たちはこの先頭に立とう」と呼びかけた。集会の途中で、私たちは部落解放同盟長崎県連合会の慰霊碑のある目覚町墓地に移動し慰霊祭に参席し、11時2分黙とうをして全日程を終えた。

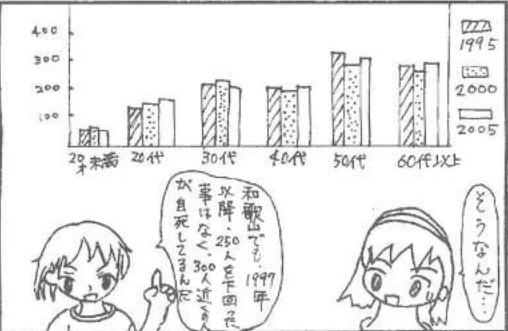


長崎県連の慰霊碑

して、2015年NPT再検討会議に向けてとりくみを強化していく「平和アピール」を確認して大会1日目を終えた。

2日目は、午前中は各分科会、午後からフィールドワークに参加した。各分科会ともに、被爆者の体験、被爆者の願いを当事者から聞き、核と人類は共存できない、これからのエネルギー政策をどうするか深く考えさせられる分科会であった。

## 世界自殺防止デー(9/10) 自殺予防週間(9/10~16)



最後に「核兵器廃絶と世界の恒久平和の実現をめざす」とのべた。2日目は、午前中は各分科会、午後からフィールドワークに参加した。各分科会ともに、被爆者の体験、被爆者の願いを当事者から聞き、核と人類は共存できない、これからのエネルギー政策をどうするか深く考えさせられる分科会であった。

## 「吾々は市政といかに闘うか」 —オール・ロマンス差別糾弾要項—

道路には、固定した店舗、特に水道設備のない飲食店は設けられないことになっているのに、四十五分間でとり片付けられるという名目で、忽ち飲食店街ができてしまった。自由党のボスの仕事であることは当然である。

高山市政の土木事業は、こんな風におこなわれている。くさいものにはふたをしる、外国人や観光客の目につくところでは、金をかけて美しくしろ。

それでいつまでたっても、部落はきれいなならぬ。たまく部落の側溝が修理される日がやってくる。設計はでたらめであり、工事は手を抜かれていく。勿論、側溝蓋などあるはずがない。それで雨が一日降ると、側溝と道の区別がつかなくなり、忽ち前より悪い泥濘の街となってしまう。部落の人間が道路を(っ)くったり、こわしたりしてしまおうのではない。市に道らしい道をつくる誠意がないのである。側溝ばかりではない。市街地のド真中でも、一寸折れこむと臭気を放つ溝渠が、ふたもされないで、放置されている。暗渠にすれば、どんなに市民がよるこぼだろうと思われるような、みにく、汚水のあるれそうな小さな

川が、市中のいたるところにみられる。こういう問題はいくらでもある。然し、市当局には誠意をもって勤労市民の毎日の生活と切りはなし難く結びついていてはならない。小さな溝、小さな側溝、小さな川を修理することは積極的ではない。勤労市民の生活を楽しく、暮しをよくさせる仕事にはまるで無関心である。

こうして、きたないところはいつまでもきたないままではうっておかれる。そうすると、一部の外国人のために美しくされるところとの違いは、きわだつて目立ってくる。不潔なところはますます不潔に、そうして「塵芥の山で埋って」いる加茂川堤、「目脂、癬瘡果ては痘痕の鼻たれつ子たちが殆ど裸体に近い風俗」で「遊びたわむれて」おり、朝鮮人が「盤踞」している街が一層みにく、露出してくることとなる。「オールロマンス」の差別の実体が鮮かに浮き出る。

(口) 保健衛生行政  
土木行政はこんな風だが九条保健所の一環衛生指導員が差別を引き起こした、保健衛生行政の実体はどんな風に行われているだろうか。(次号につづく)